

第五篇 元弘建武より吉野朝廷時代の

上田地方

上田北隣村上氏

第一章 北隣村上氏

第一節 義光父子の忠烈

村上彦四郎義光

後醍醐天皇北條氏討滅の舉を企て給ひし際、更級郡村上郷を苗字とした、清和源氏賴清流系なる、村

上彦四郎義光は

村上氏略系（尊卑分脈）

村上氏略系

賴清——仲宗——顯清

白河院藏人。昇殿。寛治八依刃舊武藏守行實事
配流信乃國。

——爲國——安國——信村——胤信——

信泰イ孫
村上彌四郎

義日テル
於宮方討死
村上彌四郎從五位下右馬頭

朝日

物領——信貞河内守
從五位下

師貞

義隆藏人、與父討死元弘三年正月
吉野城軍時

師國中務權大輔
從五位下

滿信

元弘年間大塔宮護良親王に仕へ、片岡八郎埴科郡雨宮の神官である。矢田彦七といふ傳説がある。同郡戸倉村矢田の人。平賀三郎佐久人。佐平賀の人と光林坊玄尊、赤松則祐、木寺相模、岡本三河房、武藏房等八人と共に、笠置落城の後、奈良より大和十津川、吉野あたりの間、具さに危難艱苦を嘗めて隨從奉仕し、或る時は、芋瀬庄司の強要に遭ひ、進退谷つて止むを得ず、一度渡し給ふた、錦の御旗を奪ひ還して、偉勳を立て、後元弘三年正月、宮の據り籠らせ給ひし吉野城陥落の折には、宮の御身代りと成り、壯烈無比の忠死を遂げ、其子義隆も亦、此時奮闘して同じく壯烈の最期を遂げ、以て宮の危難を救ひまゐらせた。かくて後、宮は、建武中興の大業を、助成し給ふたのである。此は世人の周知せる顯著なる史實で、我信州の誇の一つである。此義光が護良親王に仕へて、此の如く忠勤を抽んづるに至りしは、如何なる縁故關係より來りしかば、今の所判明しない。或は此時以前より京都に出て、宮に仕へまつて居たのであるか。

第二節 義光以後の村上氏

村上河内守信貞

義光義隆忠死の後、義光の弟信貞は、村上惣領と成つた。信貞は中先代の亂の時には、足利氏方に屬し、薩摩刑部左衛門等が、坂本北條城に據り、北條時行に應ぜんとせしを攻めて是を平げた。此事は市川文書經助軍忠狀に、詳細載つて居る。

信濃國市河左衛門十郎經助軍忠事

右薩摩刑部左衛門入道坂木北條江相構城郭之處先代與力仁等多植籠彼城之間當國惣大將軍村上源
藏人殿御發向之刻最前參御方經助爲大手致合戰忠實落彼城爲大將軍御眼前分捕二人打
取畢然早賜御判爲備後證一恐々言上如件

建武二年九月廿二日

承了 花押(信貞)

信貞足利氏に屬す
村上氏の勢力小
縣河西地方に及ぶ

此後足利高氏、中先代の亂を平げて、鎌倉に據つて叛きしかば、新田義貞之れが討伐に向ひ、足利氏の軍と箱根で戦ひし折、竹ノ下方面に向ひし別軍が敗れたので、義貞の軍も遂に敗退するに至つた。此時村上信貞は、足利直義の軍に參加して、義貞の軍を擊て大功を樹て、足利直義より小縣、鹽田庄を宛行はれ其勢力は埴科郡より、東小縣郡に及ぶやうに成つた。

此後、建武四年には、信貞、四郎藏人と共に、市川經助等を率ゐて京都に上り、高師泰の軍越前金ヶ崎城に據れる、新田義貞等を討滅に参加し、二月十六日には、柏山城より金ヶ崎城圍を解かんとて赴いた、脇屋義助、瓜生保等の軍を擊退し、又金ヶ崎城の大手から、城内に攻め入つて奮戦して居る。此事實は市川左衛門十郎經助軍忠狀に詳しい。此城攻には、南信の豪族小笠原貞宗も參加して、大に働いたのである。

市川左衛門十郎經助軍忠事

右屬于村上河内守信貞手於信州致忠節同道參洛之所、爲新田義貞誅伐去正月一日高越後守殿御發向之間馳參同十八日二月十二日合戰竭忠畢。十六日新田脇屋瓜生左衛門尉等爲當城後縕寄來之間任信貞手分而村上四郎藏人相共登向上山悉追返凶徒等畢。自三月二日者夜縮合戰六日者自大手一責入城内捨一命致至極合戰上者給一見御判爲備後證言上如件

建武四年三月 日

承了 高師泰花押

信貞の二子
師國は何故
足利と絶ちし
か

此後の信貞の行動に就ては、徵すべき史料を欠き、判明しない。そして信貞には、師貞師國の二子が有つたが。此二人の向動も、據るべき史料を覗き、明かにすることが出来ない。埴科郡誌載する所に従へば、信貞の二子師貞師國の二人は、高師直を元服の烏帽子親と頼み、其諱の一宇師を與へられて、師貞師國と稱することに成つた。故に高師直、足利直義と反目し、遂に殺害さるゝに至り、足利氏と絶つに至つたと云ふ。村上氏の人々の名前に、師の字の附いて居るは、見當らないのに、信貞の子は、二人ながら、師の字がついて居る所を見ると、此説の如き事も、有つたやも知れぬ。若し然りとせば、甲州須澤城に於て、高師冬が諫訪其他の諸氏に攻圍されて、城將に陥らんとする時、攻圍中に在りし諫訪五郎は、我烏帽子親を、見殺しにする事は出來ぬとて、同族の人々に、其旨を斷つて城中に入り、師冬と一緒に戦死した、と云ふ事例に従する時、村上師貞師國の兩人が、高師直を斃した足利氏と絶つのは、尤當然の事と考へられる。以上の如き經緯で、村上氏が足利氏に背いたとすれば、時日は正平六年二月即ち師直殺害の後でなければならぬ。信濃宮宗良親王の御詠の詞書に「姨捨山近く住み侍りし比夜更るまで月を見て思ひつけ侍りし」とか「更級の里に住み侍りしかば月いと面白くて秋ごとに思ひやられし事など思ひ出でられければ」などあつて、御詠みになつて、居られる所を見れば、親王が更級の姨捨山附近に、御住居遊ばされた事のあるのは、疑ふ餘地が無いのである。而して此あたりの地に、御住居遊ばすことは、此地方に尤も勢力ありしと思はるる村上氏が、建武當時の如く、依然足利方なりしならば到底出來がたい事と見なければならぬ。上述の如き事情に依て、村上氏の向動に變化があり、親王を迎へ奉つたのか、或は此事情を知つて、宮方の者が親王を奉じ來つて、村上氏に倚つたのか等の事情に依て、御來住になつたものではあるまい。埴科郡誌には「興國年中仁科の族、宗良親王を奉じて更級に來り、村上氏に頼る」とある、如何なる史料に據つて書かれたか判明ら無いが、前述の如き經緯に

依て村上氏の心境に變化を來してよりの事とすれば、正平六年以後の事で、興國年中では無いことに成る。そして此當時村上氏は、兄師貞は興國五年に死去(尊卑分脈)して、弟師國が家督を相續して居た時である。

中先代の亂

第二章 中先代の亂

第一節 北條時行の舉兵、信濃武士多く之に應ず

元弘三年鎌倉の北條氏滅亡の際、高時の子龜壽は、諫訪盛高に扶けられて諫訪に遁れ、諫訪大祝家の參河守頼重其子^{安藝}權守時繼等に庇護され、相模次郎時行と稱した。代々鎌倉の北條氏と、親善なりし京都西園寺家の公宗と謀り、北條家の再興を企てた。此時には、西園寺公宗を中心とし、北陸奥羽の北條緣故の者一時に起て、事を擧げる筈であつた。然るに京都に於て、其謀先づ露はれ、公宗が追捕せられたので、相模次郎時行は、猶豫すること能はずして、建武二年七月二十二日事を擧げた。以前から窃かに謀を通ぜしと觀え、信濃國中時行に應する者多く、所々に蜂起して、足利方に屬する、村上、小笠原等と衝突して、諸所に合戦があつた。時行の黨薩摩刑部左衛門入道が構へた坂木北條城を、村上信貞が攻め落したのも其一つである。上田市西脇に、矢島屋敷といふがあり。小縣郡年表は、舊鄉記を引いて、

此に居た矢島氏は、建武二年に諫訪より、移つて來たものと云ふて居る。建武二年の何月頃來住したか明でないでの或は中先代時行、事成らずして敗績するに及び、諫訪黨の矢島氏の人、諫訪神崇敬の篤い地方と見らるゝ、西脇の地に落ち來れるものか、或は事を擧ぐるに先ち、汎く同志を各地に配置して、

坂木北條城
上田市西脇矢島
城の矢島

北條時行諫訪に
兵を擧ぐ

勢を張る者から、諏訪氏が一黨の矢島氏の族人を、此所に遣したるものか、若し第二の如くなれば、此矢島氏の如きも、北條城に柵籠つた一人と成つたかも知れぬ。又踏入の神氏が諏訪神家の族ならば勿論、禰津神系であつたとしても、此當時は諏訪氏の味方と成つたものだらうと思はれる。

梅松論の記載

諏訪祝并滋野一族謀反を企つ

上田地方で北條時行に應じた者は、滋野一族である。梅松論に「建武元年も暮れければ同二年天下彌縫かならず。同七月の始、信濃國諏訪の上の宮の祝、安藝守時繼の父、三河守入道照雲頼重、滋野の一族等。高時の次男勝壽丸を相模次郎と號しけるを大將として、國中を駆かすよし、守護小笠原信濃守貞宗、京都へ馳申」とあり、又市河文書の市河助房等着到狀に「諏訪祝并滋野一族等依レ企ニ謀反云々」とあつて、諏訪氏を扶けて、時行の旗擧げに盡力したのは、滋野一族が主たるものであつた事は明白である。此滋野一族の中、尤も力を致すべき關係に在つたのは、諏訪神家の族と成つた禰津氏であつたと思ふ。

時行の軍鎌倉に向ふ

時行の軍は、信濃を出でゝ鎌倉に向つた。當時鎌倉に在つた足利直義は、軍を遣はして之を防がしめしも皆敗れ、七月二十三日武藏井手澤の戦には、直義自ら將として、防戦せしも戦利無く、鎌倉を保つ能はざる状勢と成つた。直義は此時人を遣はして、禁囚中の護良親王を弑し奉らしめたのである。

第二節 時行敗れ鎌倉を落つ

中先代敗る

諏訪頼重父子死し、時行父子戦死を暗らます

北條時行は進んで鎌倉を占領し、中先代と稱せられて、一時北條氏復興の形と成つた。然るに足利尊氏が、時行の討伐に向ふに及び、時行の軍は防戦悉く敗れ、八月十九日には鎌倉陥り、諏訪頼重父子も戦死し、時行は其行方を暗ますに至つた。一時勢盛なりし時行の軍が、かく脆くも慘敗し丁つた事に就て、梅松論は次のやうに、批判して居る、「八月十九日鎌倉へ攻め入り給ふ時、諏訪の祝父子安保次郎左衛門入道道潭が子自害す。相残るともから、或は降参し或は責落さる。去程に七月の末より、八月

時行没落の原因

十九日に至る迄二十日餘。かの相模次郎、ふたゝび父祖の舊里に立歸るといへども、いく程もなくして、没落しけるぞあはれる。鎌倉に打入る輩の中に、曾て扶佐する故老の仁なし、大將と號せし相模次郎も幼稚なり、大佛、極樂寺、名越の子孫ども、寺々に於て、僧喝食になりて、適身命を助かりたる輩、俄かに還俗すといへども、それと知られたる人なれば、烏合梟惡の類、其功をなさゞりし事、誠に天命にそむく故とぞおぼえし」と、如何にも尤至極の評と謂ふべきである。

第三章 吉野朝廷時代の上田地方

第一節 時行の歸順

時行の歸順と信濃の味方

北條時行は延元二年後醍醐天皇吉野遷幸の後、使を行在に遣し、歸順の上、足利尊氏兄弟を伐ちて、功を致さんと請ひ、御聽許と成つた。翌延元三年、北畠顯家が陸奥の軍を率ゐて西上するに當り、時行は兵五千餘を以て之れに會し、正月二十八日美濃青野原の戦に功を立て、又宗良親王に遠江に從て功あり、後新田義興に從て、正平七年足利基氏を鎌倉に攻め、之を追ふて功を立てしも、後義興の軍敗れ相模に隠れて再舉を謀りしが正平八年捕へられ、鎌倉で斬に處せられた。中先代の亂の時、時行に應じた信濃の人々は、時行歸順の時より、南朝方と成つたものが多かつたと考へられる。

第二節 滋野一族

上田地方に於て、吉野朝廷の時代、宮方として顯はれたるは、滋野一族を以て、其第一に推すべきで

あらう。

禰津孫次郎宗貞

禰津孫次郎宗貞

甲州相又村百姓所藏文書として、甲斐國志に載せたる、左の軍忠狀

武田按察房乘信恩息彌六友光軍忠事

右當國凶徒禰津孫次郎宗貞以下輩率多勢於□□陣取□□□□小笠原余次爲(兼カ)經、同十郎次郎大將罷向之間屬彼手、去六月二十九日野邊原御合戰之時、抽戰功大□□□次第小笠原五郎太郎令見知訖
一□七月三日合合戰之時、致忠節畢

(以下省略)

凡於所々、抽忠節上者、給御判爲備後證目安、言上如件

正平七年正月 日

に據る時は、禰津孫次郎宗貞は正平六年六月二十九日、宮方の同志を糾合し、野邊原に於て足利方なる小笠原氏の軍と戦つたことが證せられる。

又小笠原文書、文和四年(正平十年)五月二十六日將軍足利義詮より、小笠原兵庫助政長に送つた書面

に

上杉兵庫助、禰津孫次郎以下凶徒等、致合戰之由、去月十六、十七兩日戰功注進狀披見訖云々

とあり之に據て、禰津孫次郎は正平十年の比、足利直義黨にて、直義が鎌倉に於て兄尊氏の爲めに、正平七年二月二十六日殺されてより、宮方に屬したる上杉氏と力を合せ、尊氏方なる小笠原政長と戦つて居る。

又太平記に處ると正平七年閏二月二十八日信濃宮宗良親王に從て武藏國笛吹嶺の戰に參加した禰津小二郎(後鑑は名を宗貞となす)は、上杉の臣長尾彈正と共に、敵の大將足利尊氏を討ち取らんと謀り、戰敗れ

禰津小二郎

諏訪禰津等畠山
國清に從て南朝
を攻め龍門山に
敗る

し後大膽にも敵軍中に紛れ込み、尊氏に近寄らうとしたが、遂に観破され、其本意を達することを得ずして敵の中を切り抜けて、脱れ歸つた程の猛者であつた。然るに、其後正平十四年、鎌倉管領基氏の執事、畠山國清が、東國の大軍を催して西上し、南朝方を攻めた時には、禰津小二郎も、諏訪信濃守、賴繼も、畠山の催促に依て、其軍に參加し、翌十五年の四月、畠山尾張守義深の軍に從て、諏訪も禰津も共に、紀州龍門山方面に向つたが、四月三日の戦に、宮方の鹽谷伊勢守の爲めに打ち破られて、悉く敗北した。其時の有様を、太平記は次の如く書いて居る、「半時ばかりの合戦に、生虜六十七人、討るる者二百七十三人とぞ聞えし、其他捨てたる馬、物具、弓矢、太刀、刀、幾千萬といふ數を知らず。其中に遊佐勘解由左衛門（畠山の執事）が、今度上洛の時、天下の人々に目を驚かせんとて、金百兩を以て作りたる、三尺八寸の太刀もあり。又日本第一の大力と聞えたる禰津小二郎が、六尺三寸の丸鞘の太刀も、捨てたりけり。されば、大刀も、高名も、不覺も、時の運によるものなり。此禰津小二郎は自讃に常に申けるは、坂東八ヶ國に、弓矢を取る人、駆合の時、禰津と知らずで駆け合はせ、太刀打ち違へるは知らず、是禰津よと知りたらん者、我に太刀打せんと思ふ人は、恐くは覚えず、と申す程の大力の剛の者なれども、差したる事もせで、力のある甲斐には、人より先に逃げたりけり」と嘲笑的に小二郎の事を述べてある。けれども、此禰津、諏訪の兩氏が南朝攻めの軍に加つたのは、畠山の大勢力に依て催され、餘儀なく從軍したので、戰場に臨んでも、戰意が無く、戰不利と見るや逸早く逃げたものと考へられる。此禰津孫次郎、小二郎同一人にはあらざるか。

正平七年笛吹嶺の戦に、太平記載する處に據れば此戦に参加せる官軍の内に滋野の一族三十人、神家一族三十五人ありしと云ふ。此に何人と其數を記してあるのは、雜兵輕輩でなく、相當名の知れた人々を算へたものであるから、三十一人と云へば滋野の一統中に、忠勤の士が甚だ多かつたのを、知る

ことが出来ると思ふ。其中で濱野八郎海野氏系岡海野善幸は佐久郡長倉の地に住し碓氷權現社に仕へたりしが、正平七年新田義宗同義興・脇屋義治等北畠親房に應じ、上野武藏等に兵を擧ぐるや、其族人を率ゐて宗良親王の軍に屬し、閏二月二十八日新田氏と共に、武藏小手指原笛吹嶺等に於て、足利尊氏の軍と奮戦せしも其遂に利あらざるに及び、宗良親王を奉じて諫訪に退き、其後尙宮方の爲めに大に盡す所ありしと傳へられて居る。

直冬尊氏相戰ひ
信濃宮方之を機
として大に起る
望月の貢駒不可
能

正平十年の春、足利右兵衛佐直冬^{義義}、足利尊氏と京師に戰つた。其を好機として、信濃ノ宮方が蜂起し、禰津孫二郎、上杉兵庫助等の宮方と、尊氏方の小笠原氏等との間に、合戦があつた小笠原、園太曆文書。正平十年八月十七日庚午の條に、

今日聞、駒率依ニ信州合戦不レ及ニ沙汰之由。馬所注進到來云々。妙法院宮爲ニ大將軍被ニ合戦周防祝（諫訪）
(上下)并ニ仁科合力。以外也。仍國中騷動不レ及ニ國役沙汰云々。其趣付ニ奉行職事申入之旨語レ之
とあつて、正平十年の八月に、妙法院宮即ち宗良親王が、大將軍と成り、諫訪祝、仁科氏等之に屬して戦があり、國內騷動の爲め、國役の沙汰も出來ず、又建武年中行事に、望月ばかりは、貢駒の事が絶へなかつたと謂はれて、面目を施した、佐久望月の御牧も、例年通り貢駒の事、不可能と成り、名高き望月の駒率も、無かつたと云ふ。此は此年の八月中旬に、筑摩郡桔梗ヶ原で、信州の宮方衆が、宗良親王を奉じて小笠原氏と戰ひ、双方共に手負死人甚だ多かつたが、宮方は大將分の一人なる、諫訪祝矢島正忠が流矢にて討死し、遂に敗退した其戦の時である(沙彌道念記録)。此戦には諫訪衆が多く參加して、主力と成つて居るのを見ると、小縣の禰津氏なども、必ず參加したものと考へられる。此の如き騷動の際なりしかば、望月の駒も、多分戰場に出る武士の、乗用に徵發され了り望月の駒率も無かつたのである。

正平十四年十二月諏訪、禰津氏等は、畠山の催促に従て、南朝攻撃に參加したが、畠山國清西上の事は不成功で、評判甚しく惡かつた。依て關東に還つた後、京の陣中より、國清に暇をも告げず無斷に本国に立ち歸つた者共の、一所懸命の所領を沒收するなど、横暴な振舞多く、諸人の恨を招き、管領足利基氏より、厳しく叱責され、弟尾張守義深と共に、伊豆に引籠つたが、其後義深は、信濃に入り諏訪祝部と手を取り合つて、足利の敵に成つたといふ太平記。之に據て察すると、諏訪の祝部は、此時再び宮方と成つて居たと思はれる。禰津氏の向動も、亦之れに同じであつたらう。

第三節 上田に於ける宮方の遺物

南方朝時代に南朝の年號を奉じ、南朝方の天長地久の運を念願し其圓滿を祈請した貴重な遺物が、上田市横町宗吽寺庭内に今火燈と成て存して居る。其火燈は方形で屋根がある。そして火燈の三面には延命、寶處、寶手、持地、寶印、堅固意の六地藏の陽刻像があり、他の一面には

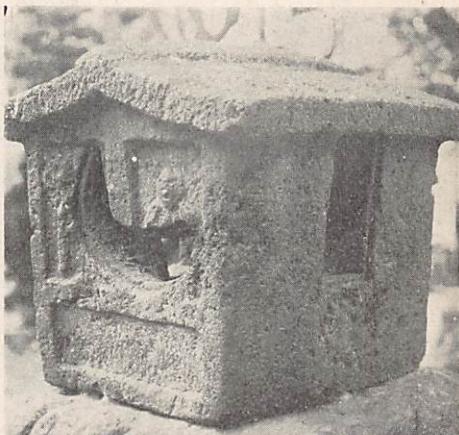
爲天長地久御願圓滿也

空阿彌陀佛敬白

正平×年巳丑七月五日

と刻してある。

此火燈は元は六地藏塔であつたのを、後人が其塔に屋根があり、形が大層面白いので、塔の内を鑿り抜いて火燈となし、棹柱を取去て下に臺を造つたものではあるまいか。臺石は火袋とは石質が全く異て居り、又六地藏尊の形が、或るものは下半身が缺け、或は左半身或は右半身が欠けて居るのを見て、しかく考へられるのである。



燈火寺畔宗町横田上

此六地藏塔は、以前は上田城大手内の地に、在つたのであるが、後宗畔寺に納めたものと言ひ傳へて居る。何れにしても、南朝年號正平・北朝年號^(在)貞和五年を用ひて、六地藏塔を造り、南朝の爲めに、祈願を凝した忠誠の人が、上田若くは其附近にあつた事は、確かに認め得るのである。其人は空阿彌陀佛と稱して居るが、さて其空阿彌陀佛とは何人であるか。何阿彌陀佛と號する事は、僧重源が一の意樂をおこし、自阿彌陀佛と稱したのが、抑の創りで、出家同朋などに、何阿と云ふは、彌陀佛の三字を略したのである貞丈雜記。そして鎌倉末より、足利時代に懸けては、出家入道した者が、何阿彌陀佛と號することが大に流行した、正阿彌陀佛とか文阿彌陀佛など其である。故に上田地方の武人の中で、入道して空阿彌陀佛と號した人が、此六地藏塔を造立したのであらうと推想される。而して常田莊は八條院御領で、此御領は後醍醐天皇其大部を御傳領せられたと云へば、其大部傳領の中に常田莊があつたならば、正平の初頃尙南朝に志を寄せて、其正朔を奉じた者が、上田あたりに在つて然るべきと考へられる。或は神氏系の人で踏入に居館を構へてゐた、其中の一人であつたのではあるまいか。此は尙研究を要する事と思ふ。